

写真は時代を映し出した

——李紹明・松岡正子編

『四川のチャン族——汶川大地震をのりこえて〔1950-2009〕』

風響社／2010年3月／416頁／5040円



塚田誠之

はじめに

一般に現代中国の公定の史書の記述には問題点が少なくない。その一つは政治性である。たとえば、『壮族簡史』〔1980〕では、民族の族源に始まって原始社会・古代社会といった時代区分、文化芸術と宗教信仰、そして近現代の中国共産党の指導下における人民の革命闘争へと続く定式化された構成をとっている。王朝の人民に対する搾取に筆誅を下しながらも生産力の発展や教育については肯定的に評価し、他方、宗教信仰をとかく「迷信」視するなど現代の政治的姿勢が過去に投影されがちである。もう一つの問題点は人々の暮らしの実態が見えてこないことである。一九六〇年代前期に内部刊行された後に公開出版された『社会歴史調査報告』の多くは、各少数民族の習俗の記述が先の「簡史」に比べて多いが、しかし経済構造・階級関係の記述が中心とされがちである。改革開放以降に、民族の風俗習慣を記述した著作が増加したが、それでも往々政治性から脱却

し切れず限界が見られる。また、文字を表象手段として使用する点での限界もあつた。本書は、松岡正子氏と李紹明氏らの四川省民族研究所とが共同研究を行い、それを通じて、人民共和国内成立以降、汶川大地震を経て今日にいたるまでの間のチャン(羌)族の人々の生活の実態とその変遷について、写真を中心とし、これに詳細な解説を付けるスタイルで明らかにしたものである。

本書の目的と構成

(1) 目的。李紹明氏の序文によると、二〇〇八年五月一二日に汶川大地震が発生した。この震災によつてチャン族の総人口三二万人のうち一〇%にあたる約三万人が亡くなり、チャン族の集居する各県が大きな被害を受けた。地震前後の姿を映し出すことで、チャン族やその地域の復興と再建に役立るとする主旨が記されている。また、袁曉文氏の「あとがき」によると、本書は共同研究の成果であり、人類学的手法によつてチャン族の社会生活を解説した著作で、一九五〇年

代以来の政治や経済・文化など諸方面で起きた変化、地震被災後の生産や生活の状況を映し出したという。くわえて松岡氏の「後記」によると、人民共和国内成立後の六〇年間のチャン族を、約六〇〇枚の記録写真(複数の研究者が異なる時に異なる場所で撮影した)と日・中・英の三カ国語による解説によつて記した民族誌である。

(2) 構成。序文・序章、四つの章、終章および冒頭のカラー写真、一九三〇年代の写真、付録から構成されている。第一章は、一九五六年から中国科学院民族研究所四川少数民族社会歴史調査組が民族識別の調査を行った際に撮影したものである。解説は、四川調査組の一員であつた李紹明氏の口述を耿静氏がまとめた。耿静氏は概説をも担当している。「大躍進」、人民公社の時期の農業・工業・政治生活などさまざまな政策、民家、学校教育、服飾や信仰における伝統文化の変化など多岐にわたっている。第二章は「暮らしの姿」、一九八〇年代以降の暮らしの記録である。村の景観、生

業、家屋と碉楼、飲食、服飾、家族などの写真からなる。第三章は「暮らしの心」、一九八〇年代以降の非物質文化、信仰や年中行事、婚礼と生育、葬礼に関する記録である。第二章・第三章の写真は一九八〇〜九〇年代のものは松岡氏が、二〇〇〇年代は中国側が撮影した。概説と解説は松岡氏が担当している。第四章は、震災後、被害の状況や復興への動きに関する記録である。耿静氏が概説を付けている。二〇〇八年九月のもの以外は中国側の撮影による。第四章では地域別の構成になっている。なお、一章〜三章のそれぞれの末尾に荏学本氏による一九三〇年代の写真が配されている。

本書の内容とそれに対するコメント

(1) 一九五〇〜六〇年代のチャン族社会
本書の内容を簡単に紹介するとともに、若干のコメントを加えたい。第一章では、農工業の発展、医療衛生の普及、学校教育の進展、政治活動が大きく取り上げられているが、かつての「簡史」等に見られた方式を踏襲する構成となつ

ている。石に刻まれた紅軍のスクローガン(1-032~036)や人々が多数紅軍に参加し支援したという耿静氏の解説から「長征」と中国共産党への賛美という政治的な編集姿勢の一端が窺われる。他方、政策の実態を窺い知ることのできる写真も多く含まれている。たとえば大躍進の時期の「大煉鋼鉄」の農村での実態を物語る写真がある。廃鉄(家庭の鍋釜の類、1-137)を材料に村の鍛冶屋が使うようなものを大きくしたようなふい(1-138)を使用して鋼鉄を作る場面がある。この政策に関して、材木を切り

尽し農業生産を無視して労働力を動員したため「労民傷財、得不償失」に終わったという、その失敗の実態を記した『当代広西簡史』編写組編2003』等の文献があるが、写真から一見して実情が推測される。大躍進の時期には、水路建設(1-102)、土壤改良(1-100・101)等に大量の農民が動員されている。地域によっては十分な測量調査をせずに工事之急ぎ、ダムなどの建設事業が失敗に帰したところも往々にして見られた(『当

代広西簡史』編写組編2003)が、四川では「九石一土」と言われた不毛な土地を耕地に変えたといわれる。三万人もの人々を動員した成都と阿壩州とを結ぶ「成阿公路」の開通が地域の発展に寄与するなど成果を取めた事業も見られたという。しかし、他の事業はどうだったのだろうか。「茂汶幸福水路」(1-102)は人々を幸福にしたのだろうか。

宗教に関わるシャマン「シピ」について、この時期に役割が変化したことが示されている。本来、羊皮鼓舞を踊るのは主にシピだったのが、一九五〇年代以降、それは本来の祭祀性のものから娯楽性をもったものに変化した(1-181)のであり、シピの宗教活動に制約が生じたであろうことが推測される。

なお、伝統的な生業や文化の変容が映し出されている点が注目される。生業について、トウモロコシ栽培について偶耕から収穫、脱穀に至る一連の作業の過程の写真がある。収穫され大量に積まれたトウモロコシ(1-091)からは従来主食であったチンクー麦、ソバ、ジャ

ガイモに代わってそれが主食になり始めたであろうことが窺われる。おそらくソバ(1-096・099)等と併用されていたであろう。トウモロコシ栽培は食料自給を可能にした(2-012)。また、サンショウ(1-107)、リンゴ(1-108)など商品作物の導入が見られたが、それらは導入されて間もなく、後に一九八〇年代以降に安定した生産が行われることになる。

後にほとんど姿を消すことになる狩猟はまだ行われていた。それは一九七〇年代以降野生動物保護の法規が制定されるまではチャン族の家庭経済の中で重要な地位を占めていた(1-112)。輸送手段は、馬によるキャラバン(1-025)、馬車(1-022)、人力で背負う方式(1-026~028)がとられていた。とくに馬は交通や農作業における物資の運搬手段として活躍した(1-120・121)。服飾については、かつて自家製の麻布の長衣を着用したが、この時期に綿布に変化したようである。写真では麻布衣服のほか綿布の長衣、内に麻布の長衣、外に羊毛製の長いベストを羽織った男性、狩人の姿、ラマ

僧の服装など多様である。女性の服飾には漢族の服装をした若い女性の姿が見え、変化しつつあったことが見て取れる。民族衣装は一九八〇年代以降には日常着ではなくハレの衣装となるが、この時期は平時にも着用していたようで、学校の児童の衣服にもそれが見られる。このように当時、変化の波が押し寄せ、新旧の双方の要素が併存していたことが窺われる。

第一章では政治性が濃厚ではあるが、生業や服飾などによって当時の生活とその変化を知ることができ、そのことによって民族誌としての体裁を保っている。またこの時期、一族の写真が二〇〇葉を超えるほどまとまって公開されるのは初めてであり、その点からも貴重である。

(2) 一九八〇年代以後の物質文化・精神文化

第二章では「暮らしの姿」として、生業、家屋、飲食、服飾などが扱われている。伝統的な要素が残るとともに、変化が生じつつあることが読み取れ

る。生業について、牛による「偶耕」(2-010)、麻の栽培(2-015)、麻布を織る作業(2-019・020)、ヤギの毛から糸を捻る作業(2-023)など伝統が見られる。一九九四年当時ほどの家庭でも麻を栽培し衣料を自給したが、近年、麻を栽培して布を作ることは稀で、民族衣装は県城で洋布を買って母親が作るか既製品を購入するという(2-019・020)。ヤギの飼養について、改革開放後に出稼ぎが収入の柱になるとヤギは激減し、多くの家庭で人手不足になり、安価で便利な衣服や肥料を購入するようになりヤギを売り払うようになった(2-021・022)。そして養豚を政府が奨励するようになった(2-024)。出稼ぎの流行によって農業の在り方が大きく変化した。二〇〇二年当時、若者や壮年男性のほとんどが農閑期に出稼ぎへ行くようになった結果、農作業や家畜の飼育は残った女たちが行うようになった。また、出稼ぎで現金収入を得るようになると主食はトウモロコシから購入した米にかわった。米はかつてはハレの日の食物だったが日常的なもの

になった(2-067)。さらに二〇〇二年に車道が開通すると、ピーマンやキャベツなど都市向けのヤサイの栽培が始まった。麻の栽培やヤギの飼育の写真が一九八〇年代後半から九〇年代前半に集中していることと考え合わせると、こうした出稼ぎの流行とともに生業に大きな変化が生起するのは一九九〇年代半ば以降のことと思われる。なお、サンショウ(2-027・028)やタバコ(2-032)などの商品作物の栽培は盛んに行われている。サンショウについては新しい接木法や政府の補助金によって普及し主要な経済作物となった(2-027・028)。輸送は松岡[2000: 84-86]によるとまだ伝統的な人力による荷担ぎが残存していたが、車道の開通とともに大量輸送へ切り替わる過渡期にあったようである。

家屋は伝統的な石積みの家を造る過程(2-051・052)と工具(2-054)、多くの石積み家屋(2-034~045)、防御用の歴史的建造物の石欄(2-055~057)、さらに家屋内部の様子(2-048)、イロリの使用(2-049・050・067)などが一節

を割いて紹介されている。家屋について、北川県では漢族の影響を多く受容するなどチャン族地域でも相違が見られた(2-024)。チャン族地域内部の地域差という点について言えば、平武県では漢族に「なった」ものが一九八〇〜九〇年代にチャン族に「戻った」ため言語をはじめ漢文化の影響が顕著であるという(3-017)。生活における伝統について、ブタ肉を乾燥させた「猪膘」(2-069)が富のパロメーターとされる。神が宿る依代として屋上に白石を置く伝統的な習慣が一九八〇年代後半のこととして紹介されている(2-035・037)が、一九九〇年代以降に見られなくなっていくようである。しかし二〇〇〇年代以降は観光業の発展によって大きく事情が変化する。

二〇〇三年以降、阿壩藏族羌族自治州政府が観光業の発展のために家屋に白石を飾ることを奨励し(3-004)、チャン族地域全体に増加したという。さらに、理県桃坪郷の碉房(2-022)が、伝統的なチャン族の暮らしを伝える観光地「東方古寨」となったところ。「光寨レストラ

ン」の羌風料理(2-060)からも観光化が窺われる。「羌繡」と呼ばれる刺繡は伝統的な文化の一つであり、その技を身につけることが一人前の女性の条件であった(2-080)が、後に観光開発の一環として商品化が進み(2-082)、震災後には現金収入の重要な手段となった。服飾について、民族衣装がハレ着となるとともに、子供の日常着が商店で買っ既製服(2-089)となり、靴は安価な運動靴が普及(2-078)した。地域によってはハレ着さえも商店で購入する画一化されたものになった(2-100)。このように諸般にわたって一九九〇〜二〇〇〇年代に大きな変化が生起するが、写真ではむしろ伝統的な姿のほうが多く映し出されている。

続く第三章では「暮らしの心」として、祭山会(汶川県龍溪郷)・民間信仰などの信仰、羌年・春節・祭山会(理県蒲溪郷)などの年中行事、婚礼と生育、葬礼が扱われている。「祭山会(ガル)については、汶川県龍溪郷(3-037〜043)と理県蒲溪郷(3-072〜088)の双

方の過程を比較することができる。いずれも豊作祈願として村民たちの参加のもとに行われ、行事においてシビが经文を唱え中心的役割を占める。ヤギの供犠をとまなう。両者を比べると、地域性や行事が行われた時期の違いもあるが、松岡氏が観察した後者のほうが詳しい。祖先の移住史を演じ(3-083〜085)、シビに率いられて集落の境界を廻る行為は前者には見られない。集落の境界を廻る行為について、「松岡 2000: 233」では、この行事が豊作祈願のほか地域集団への帰属と団結を意識させることを目的としたであろうことが指摘されている。出稼ぎなどによる生活圏の変化が推測されるので、前者の行事の取材が行われた二〇〇五、六年には変化していたのかもしれない。前者の祭山会は伝統的にはチャン族の新年である農曆一〇月一日の前日から新年にかけて行われるはずであるが、写真は二〇〇五年は八月、二〇〇六年は七月に行われている。この時期のズレは漢族的な春節の受容の影響なのだろうか、あるいはそれが伝統的な民族文化資

源として注目され復活する(3-030)過程において変化したのであるか。この点について補足説明が必要であろう。なお、理県蒲溪郷の「羌年」の過程(3-051~058)とともに、儀礼の重要なポイントが写真で示されている点は、わかりやすく、写真による説明が有効である。理県蒲溪郷のガルは四〇年ぶりに行われたもので、その詳細な過程は「松岡 2000: 223-235」に記載がある。さらに女性の

祝日「瓦爾俄足」(ワルオズ)、婚礼・生育・葬礼が紹介されている。中でも葬礼(火葬)の過程は詳細である。蛇足ながら写真にはシビが見えないが、そのことは死者が六〇歳以下だからなのだろうか、あるいはシビが登場する汶川県龍溪郷のそれ「松岡 2000: 125-134」とは地域的な相違があるのだろうか。この点、補足説明が必要であろう。なお、火葬はチャン族伝統の葬法であるが、清代中期以降、漢族の影響を受容して土葬を行う地域のほうが多くなっているという(3-149~151)。

二章・三章は政治性から離れて、庶民

の暮らしや信仰が写真とその解説を通じて細部にわたるまで徹底して紹介されており、民族誌として充実した仕上がりになっている。

(3) 震災後の状況と復興

前掲のように大地震のためチャン族の主要居住区では甚大な被害を受けた。第四章では各地の災害と復興の状況が示されているが、まず壊滅した北川県城(4-081~086)や汶川県羅卜寨(4-002・006~009)など、地震の惨状が一見して明らかである。次に復興の状況について、きれいに新築された家屋や学校の様子を写した写真が多く紹介されている。中には村ごと再建された例もある(4-044)。解説では具体的な被害の状況と復興の現状、復興計画が記されている。中には国家の政策で一九の省市の「対口支援」を受けての復興の紹介もある(4-021)。第三に文化の創出が挙げられる。北川羌族自治県において、屋根に白石を模したセメント製の飾りを置いた家屋(4-094)やレストラン(4-099)、さらにはコンクリート製の碉楼が建てら

れ吉那羌寨と名づけられた復興モデル村の姿(4-092)など、観光用に羌族文化を強調するための場面が登場する。「羌文化」の特色を強調する再建方法は茂県にも見られる(4-068・070・071)が、復興が観光開発という政策がらみであることを感じさせる。

注目されるのは、新築された建築物の紹介とともに、被災後の暮らし(4-102)、テント生活(4-026・103)、板屋での生活(4-055)、壊滅したなかでも農作業にはげむ人々(4-014・017~020・027)、刺繍で現金収入を得る女性たち(4-028・052)など人々の姿が映し出されている点である。これらの写真によつて、政府による復興の宣伝に偏らず、民族誌としての体裁が保たれている。

本章は二章・三章と違って人々の暮らしについてはその一部しかわからない。当然、震災と復興という主題ゆえに、それまでの部分とは内容が異ってくるが、しかしシビの關係する行事やハレの行事については不明である。シビは高齢化しているそうだが、冠婚葬祭の様子はどう

であるのか、その際にシビは登場するのか、祭山会が行われているのか等、さまざまな関心が湧いてくる。中国側としては復興の順調な進展を主張したい思惑があるだろう。しかし震災はチャン族の衣食住や生業・行事までを変えたのだろうか。とすれば何をどこまで変えたのだろうか。復興作業が進められているなかで、そうした取材には制約があるろうが、中国側はこうした点にもふれてほしかった。現在の中国において政府の支援なしでは復興が容易に進展しないし、国家との関わりそれ自体も民族誌の一部ではあるが、震災を越えて現地で生きる人々の姿の記録を多く伝えてほしかった。松岡氏は撮影者が何を写し、何を写さなかったのかというそれぞれの視点が反映されるというが、ここにこうした中日双方の姿勢の相違の一端が現れているように見受けられる。

おわりに

何が変化し、何が変化しなかったのか、またどのように変化したのか、数十

年の時間における変化のダイナミズムを写真は映し出している。松岡氏によると、記録写真は、記憶や事実を伝えるための有効な表象手段で、撮影者の意図を超えて読者に多くのことを語りかけるものである。もちろん写真であっても意図的に写さなかったり、あるいは選ばなかったものがある。こうした写真の操作の仕方によっては必ずしも文字媒体によるものよりも説得的だとは限らない。しかし、本書は(中国的手法、政治性が垣間見られるものの)写真とその解説による民族誌という点では成功している。一九五〇〜六〇年代については一民族の写真がまとまって紹介されるのは初めてであるし、一九八〇〜九〇年代についてチャン族の暮らしが克明に記録された点でたいへん貴重である。

それにしても、松岡氏が、人々の暮らしの細部にまで行き届いた記録写真を残していることには瞠目を禁じ得ない。水汲み(2-025)、薪集め(2-026)、日常の食事(2-058)から、家畜の飼料の作り方や回数(2-024)、イロリの鉄三脚の意

味や白石からの変化(2-074)、分家の際のその分与(2-074)、さらには喫煙の仕方(2-032)等、氏の観察眼の鋭敏さが随所に現れている。

そして、写真に映し出された人物はとくに二章・三章を中心として、生命力が旺盛で、前途の希望に満ちているように感じられる。シビでさえも祭山会やワルオズ儀礼(3-098)での姿は躍動しているかのようである。一九八〇年代の改革開放以降、経済的に大規模な発展を遂げて二〇〇〇年代に世界の大国に台頭するに至る時代は中国の人々が前途にあふれる希望と期待を共有してきた時代である。人民公社の時期は人々はどこらかといえど受動的なように見受けられるが、ともあれ、こうした中国の時代の変遷とともに生きる人々の姿をカメラは映し出したのである。

なお、最後に、本書の出版は日中での共同研究・共同作業を経てはじめて可能になった。こうした作業は、それぞれのスタンスの違いから困難がともないがちである。幾多の困難を乗り越えて本書を

上梓するに至った松岡氏や関係各位に敬意を表したい。とともに本書が新しい民族誌のあり方を切り開くものとして多くの読者に読まれ、そして写真と解説による民族誌の意義をめぐって議論が高まっていくことを期待する。なお、文中で評者による読み違い、誤解があれば、識者のご指正を仰ぎたい。

注

〈1〉 茂県維城郷赤不蘇はチベット族地区に近く、ラマ僧の服装(104)に見出されるようにチャン族の一部はその影響を受けてチベット仏教を信仰する。チベット族の影響については、第二章で瑪瑙を並べた首飾り(2093)が指摘されているが、チベット族との民族間関係の解説にもう少し紙幅を割いてもよいように思われる。

〈2〉 漢族の影響は土地廟などの廟、道教系の仮面劇、屋内の神棚の神位にも見出されるという(三章概説)。くわえて一九三〇年代以来チャン族の伝統的生業の一つであった漢方薬材の採集について、早期から四川省内の漢族が多数入山し乱獲したことが指摘されている(203)。

こうした漢族の中には民国期に漢方薬材の採取に来てそのままチャン族に婿入りするものも少なくなかった(304)という。

〈3〉 他民族からの影響を理解する上で、各県の民族別人口比率に関する情報が必要であろう。

〈4〉 この点について松岡氏は地震の概況や直面する諸問題を整理した上で、民族文化資源の復興について論じている。その中で李紹明氏の発言を引用し、チャン族の特色を強調するためにコンクリートの欄を作新築の家屋の屋根に白石を模したセメント製の飾りを置くなど、民族の伝統文化から乖離した方向へ向かうことに警鐘を鳴らしている(二〇〇九年一月一日、国立民族学博物館共同研究会「民族文化資源の生成と変貌」における口頭発表)。

〈5〉 新築された建築物や対口支援、文化創出などの政治的な部分が中国側の撮影で、震災を越えて生きる庶民の姿の多くが松岡氏の撮影による点に端的に現れている。

〈6〉 本書について金丸良子氏による要を得た書評がある。一九七〇年代が欠落していることの説明がないこと、「民居」

の表記については評者も同様の感想を抱いた。併せて御覧いただきたい「金丸2010」。なお、「付録」として、「羌族歴史年表」、「羌族地区の考古概略」、基本参考文献、チャン族の人口に関するデータが資料として付けられている。「羌族歴史年表」、「羌族地区の考古概略」はチャン族の歴史的背景を理解するための資料として中国側が提案したのであるが、「考古概略」は不要ではなからうか。歴史についても殷周時代の「羌」と現在のチャン族とを説明なしに結びつけることでそれが既定の事実であるかのような誤解を与える恐れがある。

参考文献

- 《当代広西簡史》編写組編 2003 『当代広西簡史』北京：当代中国出版社。
- 金丸良子 2010 「チャン族の地震前後の姿を映し出す民族誌」『東方』第三五三号、二二―二五頁。
- 松岡正子 2000 『チャン族と四川チベット族——中国青蔵高原東部の少数民族』東京：ゆまに書房。
- 《壮族簡史》編写組編 1980 『壮族簡史』南寧：広西人民出版社。